草梁倭館の六期に分つて其の變遷を述べ「李朝儒學史に於ける主理派主氣派の發達」は李退溪奇高峰の四七論爭附崎門學派と李退溪、李栗谷の四七說、四七論爭と朱子の學說、嶺南學派の四七說、畿湖學派の四七說、農巖門派の四七說の六章を立てゝ此の二大學派の發達を叙述し其他の諸篇何れも朝鮮支那の思想、社會制度等の考證研究に係るもので學徒を啓發すること少くない（菊判六〇三頁、東京刀江書院發行、價三・七〇）〔松野〕

◉丹後地震誌

昭和二年三月突如として奥丹後を中心とし近畿を襲つた大地震は、但馬地方の震災後幾許も無く關東大地震の追憶未だ新なる時であつたゞけに、人々に地震災害の如何に慘憺たるものであるかを如實に示したのであつた。然し星移り年變ると共に兎もすればかゝる天災も吾人の記憶の外に薄らぎゆき勝であるから、其の模樣の詳細な記述は痛ましい災害のこよなき記念碑であると共に後世の戒ともなるものである。かの安政大地震の後に出た記錄の如きも、啻に避難の注意に於てのみならず震災輕減を圖らうとする例へば家屋の建方の研究に於ても去る關東大地震後唱へられたものと大差なかつたではないか。爰に丹後の地震を記錄する丹後地震誌が、當地の熱心なる鄕土史家にして自ら災厄に罹れる永濱宇平氏の手に成つたことは最も有意義な企であると共に又其の人を得たものと云はねばならぬ。

本書は大綱を前紀、本紀、後紀の三編に分ち、前紀に於て先づ諸學者の手に成れる學術調査の結果を概說し、溯つて丹後地方に於ける地震の歷史に於て古書を涉獵し地震に關聯せる火山、温泉、洪水の如き自然現象と、改元、餓死、劫火の如き人事現象に於て豐富な資料を集錄してゐる。中にも今回の丹後地震の災害を著者の直接見聞せる處より綴れるものは最も吾人の魂をうつ所である而して本紀に於ては地震の原因に關する所說の發達を叙述して北丹地震の原因に及び、そが地塊運動に基ける地辷地震であり其の性質は日本群島を横斷する方向に震動の强かつた所謂横震で、順調な餘震があり安定に歸したことを述べてゐる。次に其の震源に關する學者の諸報告

を紹介し震波の傳播狀況を見て震央地決定に至れる諸說を縷述し、各地に於ける震度の狀況より震動及び震動方向に及び、特に裂震區に於ける模樣を詳說し地震の爲起つた斷層、隆起、陷沒、山崩等の土地變動に就いて述べ其の甚だしかつた被害の詳密なる報告を收めてゐる。後紀に於ては發震當初より此の大災の各地方に傳りし經過を述べ、畏くも皇室の逸早く御賑恤あらせられしを始め當局陸海軍赤十字社新聞社等官民の熱烈なる救援救護狀況より、交通及び通信機關の復舊事情を詳說して、罹災住民の悲慘な體驗を綴つてゐるのは涙なしに讀むことは出來ない。最後に各方面より翕然として集つた同情を謝して復興の模樣を述べ、震災輕減の方法は建築物を耐震的ならしむにありと結論してゐる。

著者の博識が隨所に表れ本編の論旨を中斷せる嫌はあるが、學術的な報告は既に多種の出版がある。本書の編述は主として今回の丹後地震を中心とした詳細にして豐富なる資料の蒐集に其の價値があると言ふべきである。

（菊判四六五頁、丹後地震誌刊行會發行、價不明）〔村松〕

●史學關係諸雜誌の發刊

近時史學の發達著しく、之が研究を目的とする學會の各所に組織せられるものあり而もそれらは各自機關誌を發行して研究の結果を發表せんとするに至つた事は學界の爲め大に喜ぶべきことである。其内最近の發刊に係るものは九州帝國大學史學會の『史淵』廣島文理科大學内廣島史學研究會の『史學研究』國學院大學内國史學會の『國史學』等で、又京都帝國大學經濟學部教授本庄榮次郎氏同黑正巖氏等を中心とする經濟史研究會からは『經濟史研究』が發刊された。各々清新の氣に滿ち潑溂たる鋭氣を以て生れ出でた。吾人は之を迎へるに當り各自の健全に發達して學界に盡さんことを希望して止まない。

●京都史蹟の發刊

十數年來京都に於ける史蹟及び故人の遺業を考査顯彰し或は遺蹟保存の道を講じて可なりの成蹟を擧げつゝある京都史蹟會が、京都研究に關する權威ある發表機關が無いのを遺憾とし茲に『京都史蹟』を發刊して益々京都研究に邁進せんとするに至つた。其の趣旨は京都鄉土史